

PC業務拡大に向けた業務適性把握課題・社内実習の取り組み

○志村 恵（日総びゅあ株式会社 企業在籍型職場適応援助者）
市川 洋子（日総びゅあ株式会社）

1 はじめに

(1) 会社概要

日総びゅあ株式会社（以下「当社」という。）は、日総工産株式会社の特例子会社として2007年に設立された。主な業務は事務・PC業務、軽作業、清掃、菓子訪問販売となっている。神奈川県内に事業所があり、新横浜事業所・仲町台事業所・幸浦事業所・ESR事業所の4拠点となっている。2025年6月時点の従業員数は211名で、185名が障害者社員である（知的161名、精神18名、身体6名）。

(2) 本研究の背景と目的

近年の産業構造の変化や業務IT化を受け、当社でもIT系業務（アノテーション、キッティング等）の受注が増加している。当社は2024年度からIT系業務に従事できる人材の育成を強化しており、これまで事務・PC以外の業務に従事していた社員の業務配置転換を進めている。

2024年度職業リハビリテーション研究・実践発表会にて、OCR（Optical Character Reader）データを活用した文字の入力課題（以下「OCR課題」という。）と5日間のPC業務実習を組み合わせて業務適性を把握し、業務配置転換を行う取り組みについて報告した。今年度は業務適性把握の精度を上げるために、新たな課題を組み合わせて実施した。本研究ではその取り組みについて報告する。

2 方法

(1) 課題の概要

2024年度に実施したOCR手書き・PC課題（志村¹⁾を参考）でPC業務適性がある見込みの社員を対象に、3種類の課題を実施した。課題実施期間は2025年2月から6月までであった。

ア OCR（PC入力）課題

見本の文字（英数漢字・平仮名・片仮名・記号）を枠内に入力する課題を実施した。3シートで構成され、1シートの平均時間が15分以内・1シート内のミスが5個以内を合格とした。

イ 項目入力課題

見本の表を見ながらデータ（日付・部門名・氏名など）を入力する課題で、制限時間を30分とした。入力数とミスをした数をカウントし、正答率を出した。複数の項目を自分で追うことができるか（必要であれば入力した行にチェックを入れるなどの工夫ができるかどうか）を確認することができる。また、氏名の項目では読み方を予測したり、

IMEパッドを使用して文字を調べたりすることができるか、集中力が持続するかを確認した。

ウ 電卓課題

電卓を使用して計算をする課題で、1枚30問のシートを3枚用意し、制限時間30分以内で実施した。計算した問題数とミス数をカウントし、正答率を出した。PCのテンキー操作の動きを想定し、手の使い方や目線の動かし方を確認した。

(2) PC実習

課題の遂行状況から業務適性が高いと判断した社員を対象に、IT部門でのPC実習を実施した。期間は5日間で、IT部門の社員が実際に従事している業務のトレーニング版（7項目）を実施した。トレーニングに合格した後は本番を行い、トレーニングで習得した内容を実際に活用できるか把握した。PC実習終了後、トレーニング・本番業務の遂行状況と行動観察を記録した。

3 結果

(1) 課題による業務適性把握

課題実施人数は30名（仲町台事業所27名・幸浦事業所3名）であった。男女比・障害種別を表1に示した。OCR（PC入力）課題を合格したのが22名（以下「合格群」という。）、課題不合格者が8名（以下「不合格群」という。）だった。2025年7月時点でPC実習を実施したのが18名であった。

表1 男女比・障害種別

		人数	課題合格者
男女比	男	20	14
	女	10	8
障害種別	知的(B1)	6	4
	知的(B2)	19	14
	精神	3	2
	身体・知的	2	2

課題合格群と課題不合格群の課題実施結果の平均値を表2に示した。合格群と不合格群の各課題実施結果の平均値の差の検定を行った。その結果、OCR課題実施時間と項目入力課題入力数において、5%水準で有意な差が見られた。その他については有意な差は見られなかったが、全ての課題で合格群の方がミス数は少なかった。一方、電卓課題計算数については不合格群の方が平均値が高かった。

表2 各課題実施結果の平均値

課題		合格群 (N=22)	不合格群 (N=8)	有意差 * $p < .05$
OCR 時間	M SD	11.18 2.42	16.46 7.00	*
OCR ミス数	M SD	6.27 3.08	12.12 8.91	
項目 入力数	M SD	92.90 24.04	70.37 26.33	*
項目 ミス数	M SD	2.86 2.79	4.75 9.86	
電卓 計算数	M SD	64.50 11.44	66.75 17.58	
電卓 ミス数	M SD	1.77 2.40	3.12 2.16	

(2) PC実習

PC実習実施者18名中、トレーニング7項目全て合格したのが11名、6項目合格者が4名、5項目合格者が1名、4項目合格者が2名であった。さらにこの内4名（7項目合格者3名、4項目合格者1名）が、IT部門へ業務配置転換の対象となった（2025年8月時点）。

実習中の行動観察について表3に示した。

表3 PC実習行動観察

業務配置転換 対象社員	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉に置き換えてメモが取れる ・不明点を積極的に質問する ・マニュアルを参照して不明点を解決できる ・苦手な部分について自ら工夫し改善できる（見落とし→指差し確認するなど）
その他の社員	<ul style="list-style-type: none"> ・自らメモを取らない（メモを取る習慣がない、どこをメモしたらよいかわからない） ・メモがマニュアルの丸写しになる（応用が効かない） ・ケアレスミスや見落としが多い

トレーニング内容は様々な情報・パターンの中から必要な情報を抜き出す作業で、論理的思考が求められる。業務配置転換対象者は不明点を積極的に質問したりマニュアルを参照したりしながら、自分が知りたい情報を抜き出してメモに取ることができていた。また、トレーニング中のミスとそれに対するフィードバックを前向きに受け止め、トライアンドエラーを繰り返しながら精度を高めようとする柔軟性も共通して見られた。

4 考察

本研究では、3種類の課題とPC実習を通して業務適性を把握し、業務配置転換へつなげる取り組みを行った。分析の結果、OCR課題の実施時間及び項目入力課題の入力数は合格群と不合格群で統計的に有意な差が見られた。この結果から、合格群はPCによる課題遂行速度や情報処理

速度が速い傾向があると言える。不合格群の中には、普段の業務（お菓子の箱折りなど軽作業）での作業遂行速度は速いが、課題遂行速度は遅い社員もいた。PC操作はマウス・キーボード・画面など複数の操作を同時にを行うことや、指先での操作から画面上の動きを予測する必要がある点が軽作業とは異なると推察される。

一方、電卓課題については不合格群の方が計算数が多い（速度が速い）結果となった。しかし個別のデータを見ると、計算数が多かった人はミス数も多い傾向が見られた。電卓課題以外でもミス数が多く、指先の動きの速さに対して数字・文字の見間違が発生しやすかった。画面・紙面上の情報を正確に処理できることは、PC業務適性の1つであろう。

課題を実施することで、基本的なPC業務適性の把握できたと言える。実習からは、様々な情報から自分に必要なことを選択して取り入れる力や、ミスに対してフィードバックを取り入れ、工夫や調整を繰り返し、改善しようとする前向きさ・柔軟性も、実際の業務に従事する上で重要なことが示唆された。

5 まとめと今後の課題

本研究では3種類の課題と実習を通してPC業務適性を把握し、業務配置転換につなげることができた。今後の課題として、業務のDX化やAIの発展が急速に進み単純入力作業は減少すると言われている。障害者社員がどのような業務を担っていくのかを見極めつつ、新しい情報や技術を自ら取り入れられるようにサポートする方法・社内体制を整えていくことが必要だと考える。

社会全体としてリスクリギングやキャリアチェンジという考え方方が浸透しつつある中、障害者社員のキャリアについても広い視点に立って自ら組み立てていくことが求められる。本研究がその一助となれば幸いである。

【参考文献】

- 志村恵『OCR データ転記・PC 入力課題による業務適性把握と業務配置転換への活用』、「第32回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集」、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、p. 88-89

【連絡先】

志村 恵

日総びゅあ株式会社 人財戦略室

e-mail : k-shimura@nisso.co.jp